様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５０９

研究課題名（和文）ヴィクトリアニズムの呪縛―カリブ海地域の文学にみるアフリカ系ミドルクラスの肖像

研究課題名（英文）Spells of Victorianism: Portraits of the African Middle Classes in Anglophone Caribbean Literature

研究代表者
岩瀬　由佳（IWASE, YUKA）

東洋大学・社会学部・准教授

研究者番号：６０５９５４１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、旧イギリス植民地であるカリブ海地域出身のアフリカ系作家の作品分析を通じて、旧宗主国のヴィクトリア朝中産階級的価値観が円滑な植民地化にいかに寄与してきたのかについて、明らかにした。特に、上からの抑圧的な支配だけではなく、被支配者側の家庭内からの補完作用、つまり、被植民者の母親たちによるこのヴィクトリア朝中産階級的価値観の支持と家庭教育の相乗効果により、被植民者の内的植民地化を効果的に推進するに至ったという結論を導き出すことができた。これは、被植民者の中産階級にその傾向が強い。

研究成果の学術的意義や社会的意義
イギリス植民地であったカリブ海地域の文学に焦点を当て、イギリス本国では遠い過去のものとされる価値観が、植民地においては温存され続け、歴史的にみても、被植民者の内的支配に関して大きな役割を果たしてきたことを今回の研究で解き明すことができたのは、非常に学術的かつ、社会的にも意義が高いことであり、世界的にみても独創的な研究に位置付けられると判断する。

研究成果の概要（英文）：In this study, focusing on works of African Caribbean writers from ex-British colonies, I examine how effectively the middle-class-Victorian values have contributed to colonization. Especially, I explore the functions of mothers in the middle classes of the Anglophone Caribbean countries.

研究分野：英語圏文学

キーワード：カリブ海地域の文学　ポストコロニアリズム　ヴィクトリアニズム　ジェンダー研究　中産階級　アフロ系カリブ作家

１．研究開始当初の背景

「ヴィクトリア女王は、影のように、幽霊のように、植民地の島々を包み込み、啓蒙という名の彼女の殿堂は、1901 年の彼女の死後もずっと、19 世紀にイギリス植民地主義が頂点に到達した後も植民地で影響を及ぼしたのだ」(2)という Kathleen J. Renk の言葉通り、イギリス本国ではすでに形骸化し、「過去の遺物」となった価値観が植民地ではそのまま温存されるだけではなく、さらに強化され、人々を根深く支配していたと考えられる。それゆえにカリブ海地域は、ヴィクトリア朝の亡霊、Victorianism の呪縛に取り憑かれていると評され、その傾向は中産階級に顕著であるとされる。Louis James によれば、「1900 年ごろまでに中産階級のジャマイカ人たちは、大英帝国の一員であることを誇らしく感じていた」(46)のであり、1936 年にジャマイカを訪れた Zora Neale Hurston も「イギリス人のように話し、イギリス人のように振る舞い、イギリス人のように見えることを誰しもが目指している」と皮肉っている。宗主国から遠く離れた島々にあっても、宗主国の価値観を体現することが植民地社会の教養ある者の嗜みであった。言い換えれば、円滑な植民地支配とは、宗主国のミニ・クローンを生み出すことであり、その原動力の一端を被植民者の中産階級層が担っていたと考えられる。

そこで、本研究では、そういった被植民者中産階級の体現者の一人であり、ジャーナリスト、作家として活躍したアフリカ･ユダヤ系ジャマイカ人の Herbert George de Lisser (1878-1944) に着目するとともに、時代変遷とジェンダー間の差異を比較検討するために “Jamaica’s First Lady of Comedy”と評される女優であり、詩人、民俗学者であった Louise Bennett (1919-2006) の詩と著作、同じくジャマイカ出身のアフリカ系女性作家であり、社会学者でもある Erna Brodber (1940 -)の小説を研究対象とした。

２．研究の目的

本研究では、旧イギリス領カリブ海地域の文学に頻出する「Victorianism」に着目し、特に、ヴィクトリア朝中産階級的価値観がいかに植民地支配に寄与し、現代に至るまでその影響力を色濃く及ぼしてきたかについて明らかにするとともに、長らく植民地社会/文化のトレンドセッターであった被植民者の中産階級層と「Victorianism」をめぐる複雑な関係性とその時代変遷について、ジャマイカのアフリカ系中産階級の三人の作家たち、Herbert George de Lisser、Louise Bennett、Erna Brodber らの作品を研究対象に、植民地主義、エスニシティ、ジェンダーの視座から考察することを当初の目的とした。

ジャマイカといえば、Bob Marley のレゲエ、あるいはスカといったポピュラー音楽に代表される労働者階級主導のブラックカルチャーを容易に思い浮かべることができるが、歴史的に長らく、アフリカ系中産階級が社会及び文化の牽引役であった。Franz Fanon は、「第三世界の中産階級の役割は、西欧社会との仲介者であり、模倣者であり、国家と国際資本との伝送路だ」(153)と指摘しているが、国内外を取り持つフットワークと知的好奇心を兼ね備えた中産階級が抱え込む「Victorianism の呪縛」の本質を見極めることにより、植民地支配のメカニズムの一端を解き明かそうというのが、本研究の趣旨である。

また、De Lisser、Bennett、Brodber らは、カリブ海地域の文学を代表する作家であり、詩人であるが、「Victorianism に囚われる中産階級」という新たな枠組みの中で、共時的かつ通時的側面から三人各々の Victorianism に対する認識、階級意識の変容を比較考察するという点において、本研究は非常に独創的であると考えられる。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、国内だけでなく、イギリスの大英図書館（The Reading Rooms）、ロンドン大学図書館、西インド諸島大学附属図書館（ジャマイカ）において広く資料、文献を求めることにより、より論拠の確かな論文執筆に役立てる計画を立案した。また、本研究は、研究分担者のいない個人研究であることから、個人的に資料を収集、分析することを主とした研究活動であるが、海外の研究者たちとの意見交換の場として、研究の方向修正の機会として、積極的に国際学会を利用し、当研究分野に関する見識を高めていく研究方法の実施計画を立てた。

各年度の具体的な研究方法は、以下の通りである。

(1) 平成 28 年度：

主に、日本国内で入手不可能な Herbert G. de Lisser に関連する文献の収集、分析作業を行うために、旧宗主国であるイギリスの大英図書館において、調査、収集を行うという当初の計画に基づき、2017 年 2 月 21 日から 25 日にかけて、大英図書館において資料収集作業を行なった。また、2016 年 7 月には、当初の予定通り、イギリスのニューキャッスル大学において開催された The 40th Annual Conference of the Society for Caribbean Studies に参加して学会発表を行い、世界の研究者たちと直に意見交換を行う貴重な機会を得た。

(2)平成 29 年度：

Louise Bennett に関係する作品と文献に加えて、映像の収集、分析作業を行い、2017 年 9

月に国際学会の The Postcolonial Studies Association(イギリス)に参加し、2018 年 2 月に The University of the West Indies(ジャマイカ)の大学図書館において、資料、文献調査を行う計画を立てていたが、2017 年 6 月に立命館大学で開催された黒人研究学会の全国大会でシンポジウムのパネリストとしての発表依頼を受け、さらに、2017 年 10 月に鹿児島大学で開催された日本アメリカ文学会の全国大会における学会発表の依頼のため、当初の予定を大幅に変更せざるを得なくなった。9 月のイギリスでの国際学会参加と西インド諸島大学での資料収集を取りやめ、その代わりに、2018 年 2 月 28 日から 3 月 8 日の日程で、再度、イギリスの大英図書館にてリサーチ活動を行なった。

(3)平成 30 年度：
2018 年 4 月 1 日より 2019 年 3 月 31 日までの東洋大学の海外特別研究制度に伴い、ロンドン大学(SOAS)の客員研究員として招聘される機会を得た。これにより、当初の計画を大きく変更するに至った。計画では、国際学会の The Caribbean Studies Association での研究発表を目標としていたが、その代わりに 2018 年 7 月にロンドンで開催された The 42th Annual Conference of the Society for Caribbean Studies での学会発表に変更した。ロンドン在住ということもあり、ロンドン大学付属図書館や、大英図書館における資料収集、分析がより容易な環境となっただけでなく、海外の研究者たちとの積極的な意見交換の機会も得ることができた。

４．研究成果

当初の計画では、ジャマイカ出身の Herbert G.de Lisser, Louise Bennett, Erna Brodber の三人に焦点を当てた研究計画であったが、植民地における Victorianism の影響を人種、階級やジェンダーの問題だけではなく、家族やもっと個人的なレベルにまで波及させることにより、最終的に、Elizabeth Nunez, Pauline Melville, Jamaica Kincaid といったカリブ海地域出身のアフリカ系女性作家たちの作品にも研究対象の幅を広げられたことは、本研究の成果の一つであると考える。

ただ、研究の過程で、de Lisser の作品、著作物が想像していた以上に多く、多岐にわたることが判明したため、今後、研究を引き続き進めていく必要があることがわかった。今後、２、3 年以内をめどに、de Lisser に関しては、学会発表、論文の出版のかたちで、まとまった研究成果を発表したいと考えている。

各年度の研究実績の概要は、以下の通りである。

(1)平成 28 年度：
2017 年 7 月 6 日にニューキャッスル大学で開催された The Society for Caribbean Studies での学会発表では、スペインの研究者とジャマイカ出身の研究者とともに、A Caribbean Spin on Shakespeare というタイトルでパネルを組み、イギリスによる植民地支配という歴史的背景からカリブ系作家と Shakespeare の複雑な関係性を指摘し、旧宗主国の文化的権威の象徴である Shakespeare 作品を書き換える試みに関して、本発表では、カリブ海地域の Victorianism の影響に言及しながら、トリニダード出身のアフリカ系女性作家、Elizabeth Nunez の作品をもとに、女性の「語り」による家父長的植民地主義に対する文学的異議申し立ての手法について論じた。

また、2017 年 2 月 21 日から 25 日にかけて、大英図書館の The Reading Rooms において、主に Herbert G. de Lisser の著述作品に関して、資料収集、分析作業を行なった。20 世紀初頭のイギリス植民地で出版された初版本を実際に手にすることができ、再版本との章立ての違いなども明らかになった。大きな収穫としては、de Lisser が執筆した初等教育用のジャマイカに関する地理と歴史に関する書籍資料を入手できたことであり、植民地社会で非常に大きな政治的、社会的影響力を握っていた彼の植民地主義への加担ぶりがこの資料により明らかになってきた。

(2)平成 29 年度：
2017 年度の研究実績として、学会誌に論文を２本（単著)、国内学会全国大会発表（シンポジウム・パネリストを含む）を２回、学会報告を１本（論文形式）発表することができた。主として、旧イギリス領カリブ海地域出身のアフリカ系作家における中産階級と Victorianism の影響について考察を行なったが、前科研費採択課題である西アフリカ神話に由来するカリブ海地域のフォークロア研究（Anancy stories）とのリンクも試み、特にアフリカ系カリビアンの中産階級における Victorianism と Anancy stories への反発と受容の関連性についても研究を進めることができた。さらなる展開として、ジャマイカ出身の Herbert G. de Lisser、Louise Bennet、Erna Brodber のみにとどまらず、旧カリブ海地域出身のアフリカ系カリビアンであり、移民作家である Elizabeth Nunez(トリニダード・トバゴ出身でアメリカ移住)と Pauline Melville(ガイアナ出身でイギリスに移住)の作品も研究対象に広げ、移民作家における Victorianism の影響に関しても考察、分析を行うことができたのは、大きな成果であったと考えている。特に、親子間のジェネレーションギャップ、階級意識、ケアの問題をめぐる諸相にも焦点を当て、私小説的な側面から宗主国の古い価値観、Victorianism がもたらす陰影を本研究によって明示できたのは、本年度の実績の一つだと考えている。今後の研究展開として、旧植民地に残る作家と移民という選択肢を選んだ作家間の Victorianism の影響の差異に関して

も比較検討する必要があると思われる。

(3)平成 30 年度：
　2018 年 4 月から 1 年間、ロンドン大学(SOAS)の客員研究員として招聘を受け、本研究に関してさらに研究を深めることができた。ロンドン大学の附属図書館をはじめとして、大英図書館の **The Reading Rooms** にて貴重な資料を直に手に取りながら、考察、分析できたことは、非常に幸運なことであった。その結果として、国際学会での学会発表を 1 回、本研究に関連した５本の論文を共著（2019 年度に出版予定)、学会誌、大学紀要等に発表することができた。本研究を進めていく中で、宗主国イギリスの「過去の遺物」ともいえる「**Victorianism**」、つまり、ヴィクトリア朝中産階級的価値観が、旧英領植民地において温存されてきた理由の一つに、被植民者、特に、被植民者の中産階級の家庭内における「母親」の働きが実に大きく、その価値観の影響を受けてきた「娘」である女性作家たちの作品の中に、その呪縛に対する反発と、それに相反するかのような旧宗主国への「憧憬」が深く共存し続けていることが明らかになってきた。特に、多感な少女時代に故郷がイギリスから独立した共通体験を持つ女性作家たち、**Erna Brodber, Elizabeth Nunez, Jamaica Kincaid** などはその好例と言えるだろう。本研究では、アフリア系のカリブ海地域出身の女性作家たちに焦点を当て、イギリスやアメリカといった大国へ移住し、作家として活躍する女性作家、また故郷に U ターンして作家活動を行う作家の両者を比較分析したが、彼女たちの創作テーマには、「母親」との関係性と **Victorianism** の呪縛が複雑に絡み合い、抑圧される「娘」の反発と葛藤という構図が潜在している。また、女性作家たちの **autobiographical** な作品の持つ意義とその形式の有効性に関しても研究を展開できた点は、本年度の研究実績の一つであると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 **8** 件）

① 岩瀬　由佳、「ファミリー・ヒストリーを編む—**Erna Brodber** 作 *Nothing's Mat* **(2014)**を中心に」、『東洋大学人間科学総合研究所紀要』、査読有、**21** 号、**2019** 年、**67–82**

② 岩瀬　由佳、「曖昧さの深み—**Pauline Melville** 作 "You Left the Door Open"を中心に」、『東洋大学社会学部紀要』、**56** 巻 **2** 号、**2019** 年、**113-124**

③ 岩瀬　由佳、「悼みの流儀—ジャメイカ・キンケイドの場合」、『黒人研究』、査読有、**no. 88**、**2019** 年、**87-95**

④ 岩瀬　由佳、"Rethinking the Functions of Autobiographical Works: Elizabeth Nunez's ***Not for Everyday Use*** (2014)"、『東洋大学社会学部紀要』**56** 巻 1 号、**2018** 年、**41–51**

⑤ 岩瀬　由佳、「アナンシーの系譜—ポーリン・メルヴィルとアーナ・ブロッドバー作品にみるその影響とトリック」、『多民族研究』、査読有、**11** 号、**2018** 年、**44-64**

⑥ 岩瀬　由佳、「母と娘の間に—『アナ・インビトゥイーン』にみるケアの諸相」、『黒人研究』、査読有、**no. 87**、**2018** 年、**101–109**

⑦ 岩瀬　由佳、「生き残るための物語から文学へ—越境するトリックスターの歴史的変遷をたどる（シンポジウム **Caribbean Lives** と国際性の要旨論文）**no. 87**、**2018** 年、**13–21**

⑧ 岩瀬　由佳、「アナンシーの糸—ポーリン・メルヴィル短編小説にみるカリブ的地政学」、『東洋大学社会学部紀要』**54** 巻２号、**2017** 年、**21-31**

〔学会発表〕（計 **4** 件）

① 岩瀬　由佳、"Rethinking the Functions of Autobiographical Works: Elizabeth Nunez's ***Anna In-Between, Boundaries*** **and** ***Not for Everyday Use***", the 42th Annual Conference of **the Society for Caribbean Studies 2018** 年７月６日（イギリス　於 ロンドン大学）

② 岩瀬　由佳、「娘と母の間に—**Elizabeth Nunez** 作品にみるケアをめぐる諸相」、日本アメリカ文学会　全国大会　**2017** 年 **10** 月 **14** 日　（於　鹿児島大学）

③ 岩瀬　由佳、シンポジウム **Caribbean Lives** と国際性「生き残るための物語から文学へ—越境するトリックスターの歴史的変遷をたどる」黒人研究学会　全国大会 **2017** 年 **6** 月 **24** 日（於　立命館大学）

④ 岩瀬　由佳、"Rewriting the Canon: Elizabeth Nunez's Decolonization in *Prospero's* ***Daughter***", the 40th **Annual Conference of the Society for Caribbean Studies 2016** 年 **7** 月 **6** 日（イギリス　於 ニューキャッスル大学）

〔図書〕（計 2 件）
①岩瀬　由佳　他、金星堂　『エスニシティと物語—複眼的文学論』（仮題）「カリブ版『リア王』を書く—エリザベス・ヌニェス作『楽園においてでさえも』」2019 年 8 月（出版予定）

② 岩瀬　由佳　他、金星堂　『衣装が語るアメリカ文学』「イギリスのなかのカリブ—ポーリン・メルヴィル作品にみる偽装と衣装」2017 年 3 月 217-231

６．研究組織

(1)研究代表者
研究分担者氏名：岩瀬　由佳

ローマ字氏名：IWASE, Yuka

所属研究機関名：東洋大学

部局名：社会学部

職名：准教授
研究者番号（8 桁）：60595411

研究分担者、連携協力者、研究協力者は、特になし。